連載77 在宅医療奮闘記

平成7年より在宅を開始した私の思い出

（医）東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義（65歳・内科）

「人命に軽重はない」とは過去の話で、未来は危ういかも。～仏作って魂入れず～

その日の定期在宅訪問診療も終わり、そろそろ帰院しようと思った矢先のことでした。「先生、往診をお願いします」と当院から電話がありました。その連絡を受け、それからひと山越えて、在宅患者Y.Iさん（89歳の女性、認知症・不整脈・変形性脊椎症・廃用症候群）のご自宅へ到着したころには、すでに19時を過ぎていました。

Y.Iさんは10年来の在宅患者さんですが、最近は当院常勤在宅医が担当しているので、私が診察をするのは久しぶりのことでした。しばらくぶりにお会いしたY.Iさんは、食事量も少なく、脱水症で認知症状も進行し、寝たきり傾向にありました。さらに、心肺機能低下も合併していたので、酸素療法と点滴静注を施行しました。

現在のY.Iさんは、高齢者独居生活ではありますが、近くに住む長女が毎日様子を見に来ているのです。しかし、Y.Iさんの認知力が著しく低下しており、10分前のことも忘れてしまい、何度も同じ質問をしているようでした。娘さんは、今後のことを考えると不安で、将来は特別養護老人ホームへの入所を希望されていましたが、Y.Iさんの希望と経済的理由で、しばらくは自宅での療養継続となったのです。

このような事例に出合う度、あるフレーズが頭に浮かびます。時の総理大臣 田中角栄氏は言いました。「日本国のために、これまで寝食を忘れて汗をかき努力していただいた高齢者に一律に敬意を払い、それに報いなければならない」と。そして、一部の地域のみで施行されていた老人医療費無料化を全国に広げたのでした。

しかし、最近の社会保障の現場では、残念ながら真逆の介護医療政策となっています。いろいろな介護医療サービスの充実した選択肢は、経済力によって左右され、ややもすると人命の軽重を認める結果となっているのです。国の経済的問題（国債発行をこれ以上増やさない）の解決を優先し、人の命の大切さをおろそかにするとは、本末転倒も甚（はなは）だしいと言えるのではないでしょうか。

2015年、地方創生・地域包括ケアシステムの時代となりました。いよいよ、本格的に成熟した社会保障時代の到来です。

これからは、人の命を平等に大切にし、みんな仲良く楽しい日本を目指すといった新しい価値、すなわち幸せの尺度を変えるべきでしょう。ゆめゆめ、私たちは「仏作って魂入れず」とはしたくないものです。

「お医者さんが来てくれる」
24時間・365日態勢で対応（松山市全域）
私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。

医師数 21名
（常勤6名、非常勤15名）
内科・外科専門医 18名
（国立がんセンター勤務歴有3名）
精神科専門医 2名
麻酔科専門医 1名
（ペインクリニック科）
末期がん治療（緩和ケア）相談室開設!

Hyper Blood Viscosity（高血液粘度群）を科学する
臨床生命科学（体質・病態学、栄養学）研究所開設
機能強化型・有床 在宅療養支援診療所
（医）東西会 千舟町クリニック
松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788
http://www.touzaikai.jp/